

〈論文〉

単語テストに意味はあるのか： 単語テストと TOEIC スコアの関係

狩野 紀子

要 旨

英語の基礎力強化のために、市販の単語集を使用して語彙力を付けようとする学習者、またはこのようなボキャブラリー・ビルディングの方法を授業で使用する指導者も少なくないであろう。筆者が勤務する大学でも、ボキャブラリー・ビルディングのために単語テストを英語必修科目の中で10年以上実施している。ボキャブラリー・ビルディングにはさまざまな方法があるが、テキストの文脈の中で単語を覚えていくのではなく、単語集の独立した文から単語を覚えていくという機械的暗記学習が大学生に有効であるのかを本研究では検証してみた。具体的には1学期に10回実施している単語テストの得点と学期に1度受験することになっている TOEIC のスコアの相関を算出した。その結果、1年次単語テストの結果と TOEIC スコアの間には中程度の相関（前期 $r=0.369$ 後期 $r=0.449$ ）が見られた。また、単語テストの点数で学生を3群に分けて、分散分析で TOEIC の点数を比較したところ、単語テストの点数が高い順に TOEIC のスコアも有意に高く、語彙力はリスニングやリーディングの基礎となる能力であることが示唆された。また、学生を TOEIC スコアで、上級者・中級者・初級者群に分けて分析したところ、初級者のみに相関（後期 $r=0.329$ ）が認められた。つまり、あるレベル以上の学生には、このような単語学習法の効果はあまり期待できないが、あるレベルに達するまでこのような学習法は有効である可能性が示された。さらに、大学卒業までに TOEIC で高得点（860 点以上）を取得した学生の初年次の単語テストの成績を調べたところ、彼らの単語テストの平均は、それ以外の学生の平均より有意に高く、高いレベルに到達するためにはこのような意図的・機械的暗記学習も有効であることが示唆された。

キーワード：ボキャブラリー・ビルディング 意図的学習 単語集 TOEIC

1. はじめに

日本の中学校や高等学校では、生徒に英単語を覚えさせるために、さまざまな指導がなされている。小テストをして教科書の新出単語を覚えさせたり、多読から偶発的に単語を覚えさせたり、単語帳を作成させたり、市販の単語集を利用して語彙力を補強したりとさまざまな方法がある。単語集にも色々な工夫がされており、使用頻度が高い単語を集めたもの、意味の近い単語を集めて構成したもの、語源を基に編集したものや、日本語との語呂合わせで覚えさせるものなど多種多様なものが手に入るようになっている。いわゆる受験校ではこのような単語集を使用して語彙力を身に付けることは一般的になっているが、受験が終わった大学生の英語力をさらに伸長するために、このような機械的暗記学習は有効であるのか、本研究では検証を試みる。初年次の英語必修科目で、ビジネス場面でよく使用される語を集めた単語集から毎週60語を覚えるという課題を出し、授業中に単語テストを行った。このテストの結果と学期終盤に実施しているTOEICテストのスコアの関係を調べることによって、このような語彙学習の効果があるのかを検証することにする。

2. 先行研究

2.1 語彙力とリスニング・リーディング力の関係

外国語教育において、語彙力はリスニングにもリーディングにも重要であるということは多くの研究者が認めるところである。リスニング方略やリーディング方略で語彙力の不足を多少補うことはもちろん可能ではあるが、それでもある程度の語彙力がなければ理解まで到達するのは難しいということは多くの調査・研究で指摘されてきている。

音声言語には語と語の間に明確な境界線がないうえに、音韻変化も生じるため、リスニングにおける単語の認識は難しい。Nation (2001) は、第二言語の学習者がリスニング内容を理解するためには、インプットされた単語の 95% が既知語である必要があることを指摘している。また Kelly (1991) が英語を第二言語として学ぶフランス語話者の実験で、聴解の障害となるのは単語を知らないことであると指摘しているように、語彙力は第二言語の聴解において非常に重要な要因である。

リーディングと語彙の関係を明らかにしている調査・研究も数多くある。例えば、Jeon & Yamashita (2014) はメタ分析を行い、語彙知識は文法知識とデコーディングの能力とともに、第二言語での読解に影響を与える要因であると指摘している。また、Zhang (2012) も、中国人英語学習者を対象とした研究で、第二言語の語彙知識と読解力との間には強い相関があり、それは文法と読解力の相関より強いことを指摘している。さらに Qian (2002) は、中国人と韓国人の大学生を対象に調査を行い、TOEFL のリーディングスコアと第二言語の語彙テストの点数（広さと深さの両方）との間に強い相関があることを報告している。

2.2 21 世紀の外国語教育

21 世紀に入ると、短期間で外国語能力を向上させたいというニーズが世界各地で生じ、その需要に応えるため、外国語教育は急激に変化してきている。語学以外の教科の内容とともに外国語を効率よく習得させてしまおうという考え方も、語学教育の世界では一般的になりつつある。いわゆる内容言語統合型学習 CLIL (Content and Language Integrated Learning) である (渡部ら, 2011)。CLIL で提唱される 4C (Content, Communication, Cognition, Community) の中の Cognition では、Bloom のタキソノミーでいう、記憶→理解→応用→分析→評価→創造までが、語学の授業で要求されるようになった。Coyle ら (2010) は、記憶、理解、応用を低次思考力

(Lower-order Thinking Skills=LOTS) と表現し、分析→評価→創造を高次思考力 (Higher-order Thinking Skills=HOTS) とし、言語教育でも HOTS までを実現することが必要であると主張している。授業では、当然 HOTS に費やされる時間が増え、LOTS、特に一番下にある記憶の部分は、課題として学生個人に任される傾向にある。もちろん記憶するのは学習者個人であるが、授業において何らかのコントロール (指導) がなければ、学生に計画的に語彙を記憶する努力を要求することは難しい。このような現状を鑑みて、筆者が勤務する大学では、必修科目の授業で市販の単語集を使用して、単語の記憶を授業の一部として指導してきた。

2.3 偶発的学習と意図的学習

語彙学習の方法は大きく二つに分けられる。ひとつは偶発的学習 (incidental learning) であり、もうひとつは意図的学習 (intentional learning) である (Nation, 2001; 中田, 2017)。偶発的学習とは、語彙学習を目的としていないにも関わらず、会話や多読などの最中に、たまたま出会った単語を文脈から自然に覚えていくという学習方法である。それに対し、意図的学習は、語彙習得を目的として、単語カードや単語集を使用して、意識的に語彙知識を獲得していこうとするものである。

偶発的学習では、それぞれの単語の意味や発音、スペルや文法的な機能、コロケーションといった深い語彙知識が得られる。つまり、単語の正しい使用が可能で、自然なコミュニケーションにつながる可能性が高い。しかし偶発的学習には、学習効率が悪いという問題がある。ある未知語を偶発的に習得するためには、その語の意味を正しく推測しなければならないが、そのためにはさまざまな文脈でその語に複数回出会う必要がある (Horst et al., 1998)。ところが、実際には同じ未知語に何度も遭遇することはそれほどないうえに、たとえ意味を正しく推測できたとしても、それが語彙習得につながるとは限らないのである (Laufer, 2005)。また、テキ

スト内の既知語の割合が 95%~98% ならば、未知語を正しく予測して、偶発的学習が成功する確率は高くなる（中田, 2019）。とすると、未知語が多い初級学習者には、この方法は機能しにくいということになる。

意図的学習法では、広い語彙知識は得られるが、単語の中核的な意味しかとらえないため、文脈が変わると対応できないという汎用性の欠如という問題点がある。そもそも二つの言語間で、1:1 対応する語ばかりではないのである。また、宣言的知識を手続き的知識に移行しにくいという問題点もある（門田・池村, 2006）。つまり、ある語が知識として学習者の中に存在していたとしても、実際のコミュニケーションでは正しく使用できないことが多いのである。しかし、高頻度で使用される 3000 語がテキストに含まれる語彙の 94%~95% を占める（Nation, 2001）ことを考えると、この高頻度語を覚えてしまう方が明らかに効率がよい。

また、単語集で暗記をしてもすぐに忘れてしまうが、文脈から推測して覚えた単語は忘れないとしばしば指摘されるが、Mondria (2003) の実験では、推測つまり偶発的に学習される単語は 6% 程度であるのに対して、意図的な暗記では 50% が学習されていた（Mondria, 2003; 中田・鈴木, 2022）。このような研究結果を考慮すると、意図的な単語学習にも何らかの効果や意義があるのではないかと考え、以下の研究目的を設定して、検証を試みる。

- (1) 単語集を使用した語彙学習が英語力（Listening と Reading）に関係するのかを調べるために、単語テストの点数と TOEIC の点数の相関を調べる。
- (2) 学習者の英語力により、相関は異なるのか検証する。
- (3) 単語学習で培った語彙力により、英語力は異なるのか検証する。
- (4) 前期単語学習に力を入れた学生と入れなかった学生では、後期受験の TOEIC の点数に違いが生じるのか検証する。

- (5) 卒業までに TOEIC レベル A (860 点以上) に達した学生と、そうでない学生の 1 年次の単語テストの点数に違いがあるのかを調べる。

3. 研究の方法

3.1 単語テストの実施方法

単語テストは、1, 2 年次の英語必修科目 Listen & Read I・II・III・IV の中で、1 学期に 10 回実施している。教材は『新 TOEIC[®]英単語・熟語マスタリー 2000』(旺文社, 2009) を使用した。この単語集は、公開されている TOEIC テストの過去問題と旺文社が作成した予想問題から 10 万語を抽出して、頻度分析を行い、最重要単語 1800 語と熟語 200 語を選出したものである。1 年次の Listen & Read I と II では 1 週間に 60 単語、2 年次の Listen & Read III と IV では 75 単語を覚えることを課題として、それぞれ成績の 20% を単語テストのスコアに当てている。1 年次 (Listen & Read I・II) には、授業の最初に 60 単語のうち 20 単語をスペルアウトさせる。2 年次 (Listen & Read III・IV) では、対象となる 75 単語を含む文を 5 グループに分け、それぞれ 15 の選択肢から空欄に適する単語を選択させるという方法を取る。第 5 回と第 10 回はまとめのテストとして、300 語のうち 20 語をスペルアウトさせる。2 年次後期の第 2 回で単語集は最後まで終わり、その後は前に戻って同じ単語をテストする。2 年次には、テスト形式が選択式に変わることを、まとめのテストを実施していること、また後期 3 回以降は一度課題に出している箇所を再度課題としていることを考慮して、2 年次のテストの結果は本研究の分析からは除外した。

3.2 分析対象者

2018 年度から 2022 年度、英米語学科第 1 学年に所属した学生 383 名

(2018 年度 99 名, 2019 年度 92 名, 2021 年度 104 名, 2022 年度 88 名) を対象に分析を行った。英米語学科の学生は前期・後期 1 度ずつ TOEIC IP を受験することが義務付けられているが、事情により受験できていない学生は分析から除外した。なお、2020 年度は COVID-19 感染拡大のためオンライン授業となったので、対面での単語テストは実施できなかったため、分析からは除外した。

3.3 データ分析の方法

単語集を使用した意図的語彙学習の方法が英語力に関係するのかを調べるために、単語テストの点数と TOEIC の点数の相関を調べることにした。前期と後期では、学生の学習に対する意識や態度も変わる可能性があるもので、相関は前期と後期別々に算出した。

また、学習者の習熟度によりこのような語彙学習の影響は異なることも考えられるので、学習者を TOEIC スコアで、上級・中級・初級の 3 群に分け、それぞれの群で単語テストの点数と TOEIC のスコアの相関を調べた。なお学生のレベル分けは、表 1 に示すように、ETS の Proficiency Scale (The Chauncey Group, 2000) を基に TOEIC 730 点以上を上級者 (レベル A: Non-Native として十分なコミュニケーションができる, およびレベル B: どんな状況でも適切なコミュニケーションができる素地を備えている), 470 点~725 点を中級者 (レベル C: 日常生活のニーズを充足し, 限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる), 465 点以下 (レベル D: 通常会話で最低限のコミュニケーションができる) を初級者とした。なお ETS が指定する 220 点未満 (レベル E: コミュニケーションができるまでに至っていない) に該当する学生はいなかった。

表1 上級者群・中級者群・初級者群の TOEIC スコアと評価

群	レベル	TOEIC スコア	評価（ガイドライン）
上級	A	860-995	Non-Native として十分なコミュニケーションができる
	B	730-855	どんな状況でも適切なコミュニケーションができる素地を備えている
中級	C	470-725	日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる
初級	D	220-465	通常会話で最低限のコミュニケーションができる

さらに、単語力が Listening や Reading の力に影響するか調べるため、単語テストのスコアで学生を、単語高得点群（平均+1 標準偏差以上）、単語中得点群（平均-1 標準偏差以上～平均+1 標準偏差未満）、単語低得点群（平均-1 標準偏差未満）の3群に分けて、各群の TOEIC スコアに違いがあるか 1 元配置の分散分析で調べた。

また、途中から単語力強化に力を入れた学生と力を抜いた学生では、後期受験の TOEIC スコアに差が出るのか検証するために、前期と後期の単語テストの差の標準偏差を算出し、1 標準偏差（72.5 点）以上スコアを上げた学生を上昇群、±1 標準偏差の学生を安定群、1 標準偏差以上得点を下げた学生を下降群として、それぞれの群の学生の TOEIC スコアに違いが出るのかを繰り返しのある分散分析で調べた。

最後に、卒業までに ETS の Proficiency Scale でレベル A（TOEIC860 点）に達した学生とそれ以外の学生の 1 年次の単語テストのスコアを対応のない t 検定で調べ、初年次の単語学習の長期的な効果を検証してみた。

4. 結果

4.1 単語テストの点数と TOEIC スコアの相関

単語テストの点数と TOEIC スコアに相関関係があるのか調べるにあた

り、前期・後期それぞれの点数が正規分布しているか Shapiro-Wilk 検定で調べた。全てのデータにおいて、正規性が否定されたので（前期単語テスト $W=.848$ $p<.001$ ；後期単語テスト $W=.867$ $p<.001$ ；前期 TOEIC $W=.968$ $p<.001$ ；後期 TOEIC $W=.989$ $p=.009$ ），Spearman を使って、前・後期に行った単語テストの点数と TOEIC スコアの相関を調べた。その結果を表 2 にまとめる。なお、それぞれの相関プロットは Appendix に記載した。

表 2 単語テストの点数と TOEIC スコアの相関

	相関係数	有意確率	95% 信頼区間	
			下限	上限
前期単語×後期単語	$r=.767$	$p<.001$.721	.807
前期 TOEIC ×後期 TOEIC	$r=.774$	$p<.001$.729	.813
前期単語×前期 TOEIC	$r=.369$	$p<.001$.275	.456
後期単語×後期 TOEIC	$r=.449$	$p<.001$.361	.529
前期単語×後期 TOEIC	$r=.437$	$p<.001$.348	.518

検定の結果、前期と後期の単語テストの結果および TOEIC スコアには、 $p<.001$ 水準で強い相関が見られた（単語テスト $r=.767$ ，TOEIC スコア $r=.774$ ）。つまり、前期単語テストの結果がよい学生は後期も高得点を取るといふことであり、また TOEIC スコアも前期と後期ではそう変わらず、前期のスコアが高い学生は後期も高いスコア取るということである。一方、単語テストと TOEIC スコアの間には、それほど強い相関は認められなかった。前期には $r=.369$ $p<.001$ で「やや相関がある」程度であり、後期には $r=.449$ $p<.001$ と相関は多少高く「かなり相関がある」と解釈はできるが、強い相関とまでは言えない。加えて、前期の単語テストと後期の TOEIC スコアの相関も調べてみたが、 $p<.001$ 水準で $r=.437$ であった。全体的にみると、語彙力と TOEIC で測定される受容能力（リスニング力や

リーディング力)には中程度の相関があることがわかった。

4.2 習熟度別単語テストの点数と TOEIC スコアの相関

全体的にみると単語テストと TOEIC スコアの相関は非常に強いとは言えないものの、中程度の相関は認められる。しかし学習者の習熟度によっては、単語テストと TOEIC スコアの相関は異なる可能性がある。そこで、学習者を上級者 (TOEIC730 点以上)、中級者 (TOEIC 470 点~725 点)、初級者 (TOEIC465 点以下)に分けて、それぞれの群で単語テストの点数と TOEIC スコアの相関を求めた。各群の前期・後期の単語テストと TOEIC スコアの平均と標準偏差を表 3 にまとめる。

表 3 上級者群・中級者群・初級者群の単語テストと TOEIC スコア

	前期			後期		
	人数	単語テスト	TOEIC	人数	単語テスト	TOEIC
上級者群 平均	10	176.20	797.00	20	175.25	793.50
標準偏差		13.69	45.29		18.95	46.17
中級者群 平均	137	171.74	546.39	222	164.89	562.97
標準偏差		30.28	61.22		34.89	62.09
初級者群 平均	225	148.49	375.91	130	129.07	388.19
標準偏差		41.28	60.82		47.30	61.13

次に各群の前期・後期における単語テストと TOEIC スコアの相関を算出した。その際、上級者群のみ Shapiro-Wilk 検定で正規分布が認められたので (前期単語テスト $W=.944$ $p=.598$; 前期 TOEIC $W=.970$ $p=.890$; 後期単語テスト $W=.908$ $p=.059$; 後期単語テスト $W=.949$ $p=.359$)、Pearson を使用することとした。中級者群と初級者群に関しては、Spearman を使用した。算出された相関は表 4 に示す通りである。

上級者群に関しては、前期も後期も $p<.05$ 水準で、単語テストの点数と

TOEIC スコアの間に、有意な相関は認められなかった。中級者に関しては、前期は $r=.122$ 、後期は $r=.189$ と $p<.05$ 水準で「ほとんど相関がない」という結果が出た。 $p<.001$ 水準で「やや相関がある」と言えるのは、初級者群だけである。学習者の習熟度が高くなると、このような単語集を使用した機械的暗記学習はあまり効果がないことが示唆される。

表 4 上級者群・中級者群・初級者群の単語テストと TOEIC スコアの相関

	前期				後期			
	相関 係数	有意 確率	95% 信頼区間		相関 係数	有意 確率	95% 信頼区間	
			下限	上限			下限	上限
上級者群	$r=.364$	$p=.301$	-.345	.345	$r=-.009$	$p=.970$	-.450	.435
中級者群	$r=.122$	$p=.040$.009	.343	$r=.189$	$p=.005$.054	.316
初級者群	$r=.235$	$p<.001$.071	.241	$r=.329$	$p<.001$.161	.478

4.3 単語テストの TOEIC スコアへの影響

語彙力が TOEIC スコアに影響するのかを調べるため、単語テストのスコアを基に学生を単語高得点群（平均+1 標準偏差以上）、単語中得点群（平均-1 標準偏差以上～平均+1 標準偏差未満）、単語低得点群（平均-1 標準偏差未満）の 3 群に分けて、各群の TOEIC スコアに違いがあるか一元配置の分散分析で調べた。各群の前期・後期の TOEIC スコアを表 5 にまとめる。

前期単語テストの得点を基に学生を 3 群に分け、前期 TOEIC スコアに対して、一元配置の分散分析を行った結果、有意な差が認められた ($F(2, 369)=24.769, p<.001, partial \eta^2=.118$)。その後の検定で $p<.01$ 水準で、3 群の間にそれぞれ有意な差が認められた。同様に、後期単語テストの得点を基にして学生を 3 群に分け、後期 TOEIC スコアに対して、一元配置の分散分析を行った結果、有意な差が認められた ($F(2, 369)=29.771, p<.001$,

partial $\eta^2=.139$)。その後の検定で $p<.01$ 水準で、3 群の間に有意な差が認められた。前期・後期ともに、単語テストで高得点を取ることのできる学生 TOEIC のスコアも高く、語彙力がリスニング力やリーディング力に影響していることが示唆される。

表 5 単語テスト高得点群・中得点群・低得点群の TOEIC スコア

	前期			後期				
	単語テスト		人数	単語テスト		人数	TOEIC 平均 (標準偏差)	
	最低点	最高点		最低点	最高点			
単語高得点群	197	200	19	540.26 (86.66)	196	200	46	576.50 (118.19)
単語中得点群	119	196	293	461.08 (113.71)	111	195	185	523.39 (113.02)
単語低得点群	7	118	60	367.42 (97.24)	8	110	89	410.38 (112.30)

4.4 単語学習の TOEIC スコアへの影響

単語学習に力を入れて後期に単語テストの合計点を上げた学生と、力を抜いて単語テストの点数を下げた学生には、後期受験した TOEIC のスコアに差が出るのか調べるために、前期と後期の単語テスト合計点の差の標準偏差を算出し、1 標準偏差 (28 点) 以上スコアを上げた学生を上昇群 (後期単語テストの合計点 - 前期単語テスト合計点が 24 点以上)、 ± 1 標準偏差の学生を安定群 (後期単語テストの合計 - 前期単語テストの合計が 23 点 ~ -33 点)、1 標準偏差以上得点を下げた学生を下降群 (-34 点以上) として、それぞれの群の学生の前期と後期の TOEIC スコアに違いがあるのかを繰り返しのある分散分析で調べた。表 6 には各群の前期・後期の TOEIC の平均得点を示す。全体としては、半期で 65 点程度 TOEIC のスコアを上げている。スコアが最も高いのは前期も後期も同じような点数を取っている安定群の学生たちである。前期は安定群に続き、下降群の学

生の TOEIC スコアが高かったが、後期には下降群と上昇群が逆転し、上昇群のスコアの方が高くなった。上昇群は 80 点近く TOEIC のスコアを上げているのに対して、下降群は 35 点程度しか上がっていないことがわかる。

表 6 単語テスト上昇群・安定群・下降群の TOEIC スコア

			前期	後期
	人数	(後期単語テスト) マイナス(前期単語テスト)	TOEIC 平均 (標準偏差)	TOEIC 平均 (標準偏差)
上昇群	48	24 ~ 100	392.31 (82.62)	471.28 (104.59)
安定群	285	- 33 ~ 23	461.21 (119.02)	528.47 (121.66)
下降群	39	- 125 ~ - 34	430.42 (113.22)	465.00 (118.66)
全体	372	- 125 ~ 100	450.01 (116.89)	514.29 (122.06)

前期・後期の単語テストの得点を基にして、得点を上げているか、変わらないか、得点を下げているかで学生を 3 群に分け、前期と後期の TOEIC スコアに違いが出るのか、繰り返しのある一元配置の分散分析を行った結果、TOEIC の得点上昇である主効果 ($F(1, 369)=126.90, p<.001, \text{partial } \eta^2=.256$) の他に、群と TOEIC の得点に有意な交互作用 ($F(1, 369) = 5.177, p=.007, \text{partial } \eta^2=.027$) が認められた。図 1 が示すように、単語テスト安定群は前期も後期も TOEIC のスコアが安定して高く、上昇群は後期には下降群のスコアを抜いていることがわかる。

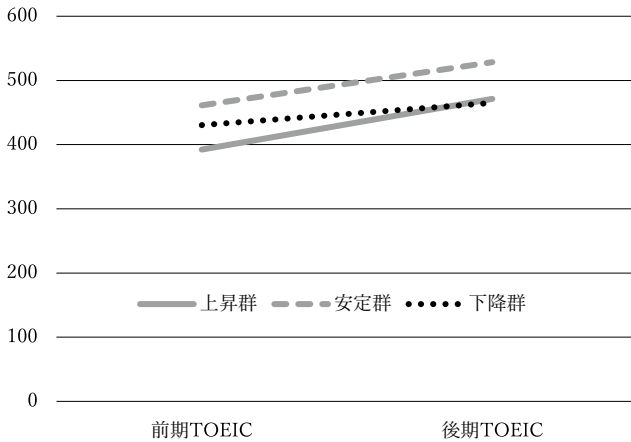


図1 単語テスト上昇群・安定群・下降群の TOEIC スコア

4.5 TOEIC 高得点取得者の単語テスト

最後に、卒業までに ETS の Proficiency Scale (The Chauncey Group, 2000) で A レベル (TOEIC 860 点) に達した学生とそれ以外の学生の 1 年次の単語テストの得点を比較し、初年次の単語学習の長期的な効果を検証してみた。なお分析対象としたのは、2021 年に卒業した学生である。彼らの TOEIC ベストスコアおよび前期・後期の単語テストの点数は表 7 に示す通りである。

TOEIC 860 以上群と未満群の平均に有意な差があるかを確かめるため、有意水準 5% で両側検定の t 検定を行ったところ、前期単語テストでは $t(97)=3.59, p<.001, d=.583$ 、後期単語テストでは $t(97)=2.12, p=.036, d=.665$ となり、前期も後期も有意な差が認められた。卒業までに TOEIC 860 点を超える学生は 1 年次の単語学習をきちんとこなしていた可能性が高い。ちなみに、彼らの 1 年次の前期の TOEIC スコアの平均は 490.56 点 (335~675) で、後期は 659.50 点 (465~755) である。彼らは入学当初から特

に高い TOEIC スコアを持っていたわけではなく、4 年間の努力でスコアを上げていった学生たちであることがわかる。

表7 TOEIC 高得点取得者とそれ以外の学生の単語テストの点数

		前期		後期	
	人数	TOEIC ベストスコア	単語テスト平均 (標準偏差)	単語テスト平均 (標準偏差)	
TOEIC 860 以上	12	860 ~ 955	176.17 (10.55)	182.75 (15.91)	
TOEIC 860 未満	87	500 ~ 855	160.97 (27.45)	162.02 (33.19)	

5. まとめと今後の課題

単語集を使用した機械的記憶に依存する語彙学習が、大学生の受容スキル（リスニングやリーディング）に関係するのかを調べるために、単語テストの点数と TOEIC スコアの相関を調べた。その結果、前期単語テストと TOEIC スコアおよび後期単語テストと後期 TOEIC スコアの間には、中程度の相関があることがわかった。当然のことだが、TOEIC に類出する語彙を問う単語テストの結果は TOEIC のリスニングやリーディングのスコアと何らかの関係はあると言えよう。

さらに、学習者の英語習熟度によって、単語テストと TOEIC スコアの相関が異なる可能性が考えられるので、学習者を上級者群、中級者群、初級者群に分けて、それぞれの群で単語テストの点数と TOEIC スコアの相関を求めてみた。その結果、上級者群では、単語テストの点数と TOEIC スコアの間に、 $p < .05$ 水準で有意な相関は認められず、中級者群では「ほとんど相関がない」という結果が出た。ある程度英語力があると認識している学生の中には、このようなボキャブラリー・ビルディングの課題には

真剣に取り組まない者が相当数おり、その結果が「相関なし」や「低い相関」という結果につながったと思われる。初級者群にのみ $p < .01$ 水準で「やや相関がある」という結果が出たことから、ある程度の習熟度に達するまで、このような意図的・機械的暗記学習の効果が期待できると考えられる。

次に、単語学習で身に付けた語彙力によって、TOEIC で測定される英語のリスニングおよびリーディングスコアは異なるのか、単語テストの点数を基に学生を単語高得点群、単語中得点群、単語低得点群に分けて単語テストが TOEIC スコアに与える影響を調べた。一元配置の分散分析の結果、前期も後期も、3群の間には $p < .01$ 水準で TOEIC スコアに有意な差が認められた。つまり単語テストのスコアが高い群の学生の方が、TOEIC スコアも高いということが言える。

さらに、単語学習に力を入れた学生と入れなかったが学生では、数か月後に受験する TOEIC スコアに違いが生じるのか調べた。前期の単語テストより後期の単語テストを頑張った学生、つまり単語学習に力を入れて単語テストの点数を上げた学生と、力を抜いて単語テストの点数を下げた学生間では、後期に受験した TOEIC の点数に差が出るのか調べてみた。前・後期の単語テストの得点を基にして、得点を上げている（上昇群）か、変わらない（安定群）か、得点を下げている（下降群）かで学生を 3 群に分け、前期と後期の TOEIC スコアに違いが出るか、繰り返しのある一元配置の分散分析を行った。その結果、主効果に加えて群と TOEIC スコアに有意な交互作用差が認められた。後期受験した TOEIC では、上昇群の学生が下降群の学生の平均スコアを超えていたのである。単語テストを頑張ったか否かでその後の TOEIC の点数に違いが出てくるということである。

最後に、卒業までに高い英語力を身に付けた学生が、初年次の単語学習にどのように取り組んでいたか、それ以外の学生の単語テストの点数と比

較することによって調べてみた。t 検定の結果 TOEIC860 点以上を取った学生の 1 年次の単語テストのスコアの平均はそれ以外の学生の平均スコアより $p < .05$ 水準で有意に高く、彼らは初年次より単語学習をきちんと行っていた可能性が高い。つまり初年次にこのような機械的記憶に依存する単語学習をきちんと行っていれば、4 年間で高い習熟度に達する可能性が高くなるのである。

本研究では、1 年次と 2 年次でテスト形式が異なるため 2 年次の単語テストと TOEIC スコアの分析は行わなかった。2024 年度より、1 年次と 2 年次のテスト形式を統一することになったので、今後 2 年にわたる継続的な研究を行っていく予定である。

また、本研究ではリスニングとリーディングのスコアを分けて分析することができなかったが、二つのスキルの間には何らかの違いがあるはずなので今後は分けて分析する予定である。

さらに、単語学習をする際にどのような方略を使っているのか、インタビューやアンケート調査を行い、学習者が使用する方略と語彙力、さらにリスニングやリーディング力との関係を調べていきたい。

参考文献

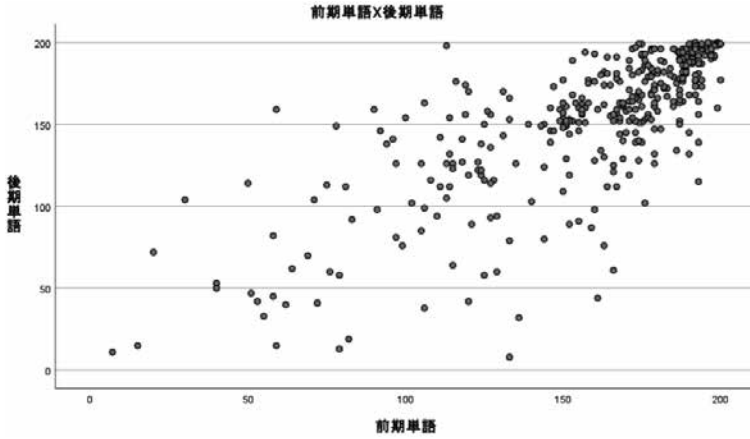
- The Chauncey Group International. (2000). 『TOEIC 公式ガイド & 問題集日本語版』. 国際コミュニケーションズ.
- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and language integrated learning*. Cambridge University Press.
- Horst, M., Cobb, T., & Meara, P. (1998). Beyond a clockwork orange: Acquiring second language vocabulary through reading. *Reading in a Foreign Language, 11*, 207-223.
- Jeon, H. E., & Yamashita, J. (2014). L2 reading comprehension and its correlations: A meta-analysis. *Language Learning, 63*(1), 160-212.
- 門田修平・池村大一郎. (2006). 『英語語彙指導ハンドブック』. 大修館.
- Kelly, P. (1991). Lexical ignorance: The main obstacle to listening comprehension with advanced foreign language learners. *IRAL, 29*(2).

135-149.

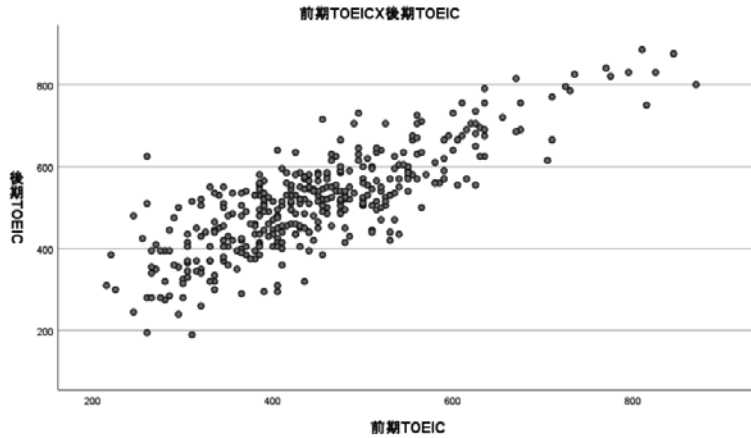
- Laufer, B. (2005). Instructed second language vocabulary learning: The Fault in the 'Default Hypothesis'. In A. Housen & M. Pierrard (Eds). *Language acquisition*. De Gruyter, 286-303. <https://smartlib.umri.ac.id/assets/uploads/files/95182-investigation-on-instructed-second-language-acquisition.pdf>
- Mondria, J. A. (2003). The effects of inferring, verifying, and memorizing on the retention of L2 word meanings: An experimental comparison of the "meaning-inferred method" and the "meaning-given method." *Studies in Second Language Acquisition*, 25, 473-499.
- 中田達也. (2017). 「単語・語彙の獲得」. 西原哲雄 (編) 『心理言語学』. 朝倉書店. pp41-71.
- 中田達也. (2019). 『英単語学習の科学』. 研究社.
- 中田達也・鈴木祐一. (2022). 『英語学習の科学』. 研究社.
- Nation, P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge University Press.
- 旺文社. (2009). 『新 TOEIC® 英単語・熟語マスタリー 2000 (三訂版)』. 旺文社.
- Qian, D. (2002). Investigating the relationship between vocabulary knowledge and academic reading performance: An assessment perspective. *Language Learning*, 52(3), 513-536.
- 渡部良典・池田真・和泉伸一. (2011). 『CLIL (内容言語統合型学習) : 上智大学外国語教育の新たなる挑戦. 第1巻原理と方法』. 上智大学出版.
- Zhang, D. (2012). Vocabulary and grammar knowledge in second language reading comprehension: A structural modeling study. *The Modern Language Journal*, 96(4), 555-575.

Appendix

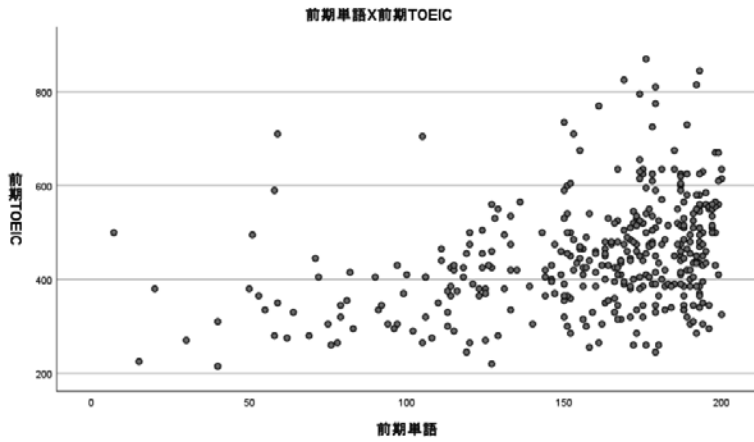
前期単語テストと後期単語テストの相関プロット



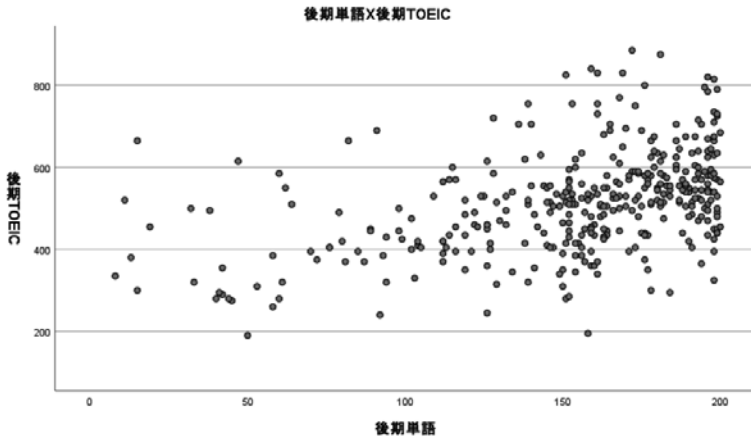
前期 TOEIC と後期 TOEIC の相関プロット



前期単語テストと前期 TOEIC の相関プロット



後期単語テストと後期 TOEIC の相関プロット



前期単語テストと後期 TOEIC の相関プロット

